慶應義塾大学学術情報リポジトリ
Keio Associated Repository of Academic resouces

Title	Oswald Dutch, Germany's Next Aims, 1939.
Sub Title	
Author	山本, 登
Publisher	慶應義塾理財学会
Publication year	1939
Jtitle	三田学会雑誌 (Keio journal of economics). Vol.33, No.9 (1939. 9) ,p.1243(95)- 1251(103)
JaLC DOI	10.14991/001.19390901-0095
Abstract	
Notes	
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00234610-19390901-0095

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

られてゐる。現在に於いては、本著は、此の最後のもの、即ちオーコンノル（A. Condorcet O'Connor）及びアラゴー（M. F. Arago）編纂の Oeuvres complètes. の第六卷所收のものより引用せらるゝ場合が最も多いやうである。

本項中には、コンドルセーの肖像及び自署並びに『下圖』初版の扉を複寫して掲げることゝした。

Oswald Dutch, Germany's Next Aims, 1939.

山本　登

昨年三月の墺太利合邦、九月のズデーテン併合、次いで今年三月の全チェコ强壓的解體と、歐洲に於ける獨逸の進出擴大は誠に目覺しきものがあり、爲めに歐洲全土は震撼するに至つた。獨逸の次の攻勢は何處の地に向けられるであらうか、其の鉾先は多年の懸案たるウクライナに向ふか、或は更にバルカンを南下するか、又は一轉して波蘭に當り、ダンチッヒ自由市及廻廊地帶の還附要求となるか、「獨逸の次の目標」は正に世界的關心の對象となつた。此の關聯に於て、先づ俎上に載せられたのは、其の第三のものであつた。玆數箇月來、此の問題を巡つて獨・波關係は頓みに惡化し、他方英國を首班として、佛・蘇其他中歐諸小國を誘つての對獨包圍陣形成の劃策は、最近に於て英・佛・蘇三國軍事同盟締結への努力に迄發展を見せたが、何故か蘇聯の態度に煮えきらぬものが看取せられた。

斯くして歐洲の情勢は著しく緊張を示し、波蘭を間に狹んで獨・伊對英・佛・蘇の對立が漸次爆發點に近付きつゝあると見えた時、又してもヒットラーの切札的行爲として、世界各國の啞然たる裡に、突如として去る八月十九日獨・蘇新通商協定の成立が發表せられ、引續き二十四日兩國間に十箇年の期限を以て不侵略條約が調印せられた。此の

事實は、過去數箇月間、對獨牽制を目標に蘇聯との軍事同盟結成を交渉中であつた英國に特に大なる衝擊を與へ、其の對獨政策を根底より覆すに至つた。蘇聯との提携によつて、獨逸にとつて波蘭分割は最早短時日間の問題と見られるに至つた一方、蘇聯により裏切られた英・佛側陣營に於ける對策、窮境に追込まれた波蘭の態勢如何によつては、歐洲に如何なる情勢が齎らされるとも計り難い現狀にある。

今や明かに、斯くの如きヒットラーの飛躍的行動に對して豫測を爲す事は全く不可能である。然し數年來の獨逸の對外活動を歷史的に回顧し、特にそれを斯かる活動を必然ならしめた世界政治・經濟情勢、就中獨逸の對外關係乃至は其の國內事情との關聯に於て檢討するならば、我々は又其處に、獨逸の進むべき途に就いて、漠然乍ら其の方向を推し得るのである。本書は本年三月チエコ解體以前に刊行せられたものであるが、前述の如き歷史的經過と最近の歐洲事情の解析の上に、獨逸の向ふべき目標に關し多くの示唆を與ふべきものとして興味深きものがあるのである。

本書を通じて一貫せる著者の見解は「ヒットラーは戰爭を欲しない。が然し彼は常に開戰を以て威嚇する」そして又「ヒットラーは自國に利益とあらば、好んで條約・協定を締結し、又宣言を發表する。が然し破約が有利となれば、忽ちにして此等を弊履の如く蹂躪する」と言ふに在る。而かも此の事は今度の場合にも事實であつた樣である。更に亦「國民社會主義運動（National Social Movement）は飽く迄一の運動であり、靜止すべきでない。是は又對內的人氣策の意味をも含んで、一事件が終了すれば次へと運動を繼續すべきものである」と解する。此の見解も亦容易に首肯出來得るものと言へよう。

斯かる根本的立場の上に、著者の分析は先づ現在の世界に於ける「滿足國」と「空腹國」の基本的對立から出發する（第一章）。此の世界的對立の本質が奈邊に存するかは兎も角として、ヴェルサイユ體制が列强間に斯かる勢力不均衡を生じ來つた事は否定し得ざる事實である。然して「滿足國」が飽く迄現狀維持を計らんとするに對して、所謂「空腹國」が其の一國としての生存權確保を目指して、現狀打破を企圖する處に、茲數年來の凡ゆる國際的摩擦の有力な原因が横はると解される。此の現狀打破派の一員としてナチス政權下の獨逸が意圖する所を、ヒットラーの著書「我が鬪爭」を通じて見れば、次の五項目に要約される（二十二頁）。

（一）大獨逸民族の大同團結
（二）中東歐に於ける經濟的制覇
（三）佛・蘇離間と此の二仇敵の各個擊破
（四）植民地回復要求
（五）對英海上權並に世界爭覇

是等の諸項目が、現實の獨逸の進出過程に於て、其の儘實行され來つたとは言ひ得ない。殊に今回の對蘇不可侵條約締結の如き、假令究極目的に對する不止得ざる一手段と解するとしても、餘りにも不信義の感を免れない。然し何れにしても獨逸の動向の基線が是等の諸項目に沿ふものである事は、大體に於て認め得る所である。

叙上の立場に基いて、獨逸の行動を檢討する場合、著者は大獨逸形成運動の經過を歷史的に顧みて、一九一五—一七年世界大戰中に於けるフリードリッヒ・ナウマン博士の汎獨逸民族思想に遡る。（第二章）此の思想の下に獨逸及墺・洪國を盟主として、中歐に廣汎な關稅ブロック結成が企てられ、所謂"Central Europe"の運動として、目された。是れに對して、他方ロシアを中心に汎スラヴ民族運動が展開され、兩者間に激しい抗爭が續けられた。而

かも帝政ロシアの瓦解により、一九一八年三月獨逸と蘇聯間にブレスト・リトウスク條約、次いで獨逸・羅馬尼間にブカレスト條約が成立して、獨逸は東部に占領地域を擴大し、宿望の中東歐制覇も殆んど完成したかに見えたのであつたが、同年秋西部戰線の敗退によつて、凡ては畫餅に歸した。斯くして、翌年聯合國側との間に締結せられたヴェルサイユ條約は獨逸から奪ひ得る一切のものを奪ひ、民族自決主義に依つて、其の周圍に多數の小國を誕生せしめた。此の際是等小國相互間の國境線は何等の經濟的顧慮なしに、全く政治的に人爲的に劃定された。斯くして政治的に獨立した是等諸小國は、其後に於て、又經濟的にも相互に孤立した經營を強行する事によつて、大戰後間もなくして經濟的困難に追込まれる事となつた。從つて、一九二一年チエコ、ユーゴー、羅馬尼を包含する小協商國(Little Entente)の成立も、其後のユーゴー、羅馬尼、希臘、土耳古を中心とするバルカン聯盟(Balkan Federation)の結成も、要するに現狀維持、自己防衛の政治的、軍事的同盟に止り、是等諸國の經濟的更生に資する所なかつた。(第三章)。加之是等の諸小國に介入して英・佛・伊及び後に獨逸等の列强が、夫々中東歐における自國の勢力圏擴大を目指して、利害相對立し又しつゝある事は、我々に親しい實狀である。少くとも一九三三・四年頃迄は（一）伊太利對ユーゴーの抗爭を中心にアドリア海沿岸、（二）波蘭廻廊地帶、（三）舊洪牙利王國の國境地方、が歐洲に於て最も警戒すべき危險地區と目された。而かも一九三三年一月ヒットラーのナチス政權が確立せられるや、此の新興獨逸にとつて、當時の混亂せる中歐の情勢は、最適の活動領域を提供した。事實此の期間を轉機として、獨逸の中歐への進出工作は極めて活潑となつた(第四章)。獨逸の此の活動に對する理論的根據は實に次の四點にあつた。(六十二頁)。即ち

（一）中歐諸國の多くは、嘗て數世紀の間、獨逸の支配下又は勢力下に在つたか、或は獨逸文化の影響下に在つた事實。

（二）其の多くの國に、所謂獨逸少數民族の居住する事實（尤も此の點に關しては、ユダヤ人も亦獨逸民族として算入せられると言ふ、ナチス一流の巧妙なる策謀が潜む）。

（三）中歐諸國は獨逸の不足する多くの原料資源の產出に富む事實。

（四）中歐諸國が東方亞細亞への通路の役割を果す事實、等である。

而して、此の場合獨逸が運動方法として採用する所は次の二種類である。即ち其の一は他國內に於ける獨逸少數民族に働きかけて、ナチス黨形成を意圖するか、或は、他國內の右翼黨を利用し、資金供給、新聞發行等の手段によりナチスの宣傳に努力を集中し、最後に機會を見て、テロ行動を惹起し、相手國を一朝にして獨逸に歸屬せしめるのであり、其の二は相手國の經濟的困難(中歐諸小國の原料生產過剩)に乘じて、原料購入、獨逸製品販賣の關係により、獨逸への經濟的從屬性を漸次强化する方策である。

以上が墺太利合邦前の經過である。そして以上の運動の成果として、起るべくして起つたのが墺太利の滅亡である(第五章)。本章に於ては一九三三年以後の獨逸の對墺工作が、主として政治的問題を中心に展開される。就中一九三四年墺國首相ドルフスの暗殺を巡つて、激しく對立した獨・伊二國が、如何に堅固なる樞軸結成へと轉回したかの事情が詳さに叙述せられる。然も著者の强く指摘する所は墺太利合邦に際してのヒットラーの不信行爲である。蓋し彼は一九三五年五月國會に於て明白に墺太利の獨立保證を宣言したのであつた。然し現實の變革の前に、斯かる宣言は一顧をも與へられる事なくして終つたのである。

次いで第六章は、チエコ・ズデーテン地方の犧牲を取扱ふ。世界大戰後の共和國成立以來、正しく多種異民族の寄

合世帯に過ぎず、特に其のズデーテン地方に多數の獨逸人を包有する事によつて、チエコは早くより、ナチス・獨逸の攻擊目標であつた。一九三三年秋、ヘンラインを黨首として結成された「ズデーテン獨逸祖國戰線」は後の「ズデーテン・獨逸黨」の前身であるが、既に此の頃よりしてナチスとの連絡は緊密に行はれた。當時一般には獨逸の中歐攻勢は先づチエコに向ふであらう事が豫想せられた程であつたが、實際には、それに先立つて墺太利合邦が成就された。然し此の時既にチエコの運命は決したかの感があつた。ヒットラー自身ではないが、獨墺合邦直後、ナチス黨領袖ゲーリングによつて發表せられた「チエコ領土の無條件獨立保證」の聲明も亦、六箇月後には何等の意義をも持ち得なかつた。昨年九月十六日のベルヒテスガーデン、同二十二日のゴーデスベルクに於けるチエンバレン英國首相とヒットラーの會見を通じて、決裂に瀕したズデーテン地方問題も、二十九日の英・佛・獨伊四國會談によつてチエコにとつての悲劇的終末を告げた。此の間に於ける歐洲政局の微妙なる動きに關する精細なる記述は本書中最も興味深く讀まれる箇所であり、且つ亦本書に引用された、四國會談へのチエコ側オヴザアーバーの悲壯なる感想錄は、讀む者をして均しく胸を打たしめるものがある。

第七章はウクライナ獨立問題を取上げる。「我が鬪爭」に於けるヒットラーの所見にも拘らず、著者も亦今日一般に考へられる如く、「獨逸は近き將來に於てウクライナ問題の解決に乘出す意志なし」との見解を明かにする（一三三頁）。本問題に就いては、兎も角、佛國と結んで蘇聯に當るか、或は蘇聯と結んで佛國に當るかゞ、其の對策の分岐點である。昨年末の獨・佛不可侵共同宣言にも拘らず、本年當初以來伊太利との友交上、對佛態度を强硬化せざるを得なくなつた最近の獨逸にとり、相互間の經濟的關係の緊密化を含めて、蘇聯への接近は見力によつては豫測し得べき事であつたかも知れぬ。以下第八章に於て對波蘭及對羅馬尼關係第九章に於ては對洪牙利、ユーゴー、ブルガリア、希臘、土耳古等の諸關係が分析せられる。是等諸國に於けるナチス黨の潛行運動の巧妙さは實に驚異に價すべきものがある。次いで第十章は是等諸小國との關聯の經濟的側面が、北海より黑海に及ぶ經濟的樞軸の形成と題して一括して扱はれる。北部方面は兎も角として、最近數年間に於ける中南歐、ブルガリア、ユーゴー、羅馬尼・洪、希、土の諸國への獨逸の經濟的進出は、既述の如き原料購入、製品販賣を通じて極めて顯著である。それは他方に於ける英・米・佛等諸列强勢力の相對的減少と共に、中歐諸小國の貿易統計に如實に示される。但し獨逸は外國爲替資金缺乏の爲め、主としてバーター制によつて交易を行ふの外なく、此の點に經濟的樞軸の大なる弱點が包藏される。從つて若し一度他列强によつて對抗的に現金購入策が採用される曉には、此の經濟的樞軸は忽ち其の脆弱性を暴露する危險を多分に含むと見られる。而かも現在に至る迄、獨逸が良く列强の競爭を斥けて、獨占的地歩を進めつゝある所以は、實に世界價格以上の高價買入策と政治的壓迫の手段に依るものである。

第十一章は獨逸國內事情の叙述に移る。著者の說く所を以てすれば、獨逸の活潑な對外活動の背景を形造る國內の經濟的基礎は薄弱である。その原因として著者は九項目を揭げるが（一八七頁）、其の中最も重大な要因は、最近の國際事情に鑑み、正常なる獨逸經濟の復興を犧牲にして、鋭意再軍備に向つて努力を集中せざるを得ない一事である。又事の眞僞は別として、國內に於ける對ナチスの國民的感情に關し、勞働者、農民階級が比較的ナチス政黨に追隨するに反し、社會の上・中層に於ては反ナチス的態度が看取される由である。併し現在に關する限り、國民の大部分はナチス思想の共鳴者であり、此の意味に於て獨逸の內部よりの崩壞は考へられないと解される（二〇五頁）。

更に第十二章は獨逸の遠大なる計畫「歐洲に於ける獨逸語使用領域の統一要求」に言及し、第十三章は獨・伊關係、第十四章は對西歐諸國關係を解明する。獨・伊關係に於ては、一九三五年以來、獨逸の唯一の味方は伊太利である事

が繰返し強調され、又西歐關係に就ては、「ヒットラーは佛國を輕視し英國を畏怖し、北米合衆國を嫌惡する」と巧みに要約せられる。（二二九頁）。

斯くして歐洲に於ける獨逸の對外關係に就き、廣汎な考察を終つた後、第十五章に於て獨逸の植民地問題に觸れ、其の返還要求を以て、正當にも對歐洲工作の補助的、僞瞞的手段として認識する。即ち植民地返還要求を喧しく提出して、關係諸列强の關心をそれに集中せしめた上、同要求に關する妥協の代償として、歐洲に於ける獨逸の地歩を進めんと劃策するのがナチス・獨逸の常套的手法である。而して嚮て植民地問題は單に比較的價値の低い舊獨領返還要求に止らずして、ヨリ良き土地の分割要求として現はれる可能性が充分に豫知せられる。斯かるヨリ良き土地として問題とされるのは北阿弗利加、南亞米利加、近東亞細亞の諸地方であり、早くも是等の地方に於てナチス一流の運動が表面化しつゝある（第十六章）。

以上の如き獨逸の全般的な而かも積極的な進出工作に對し、其他列强を始め諸小國側に於て、是れを防衛阻止すべき方策如何（第十七章）に就いて著者は次の四方法を擧げる（二七二頁）。即ち

（一）獨逸の再軍備、戰備に對抗し同樣の準備を實施する事

（二）獨逸の通商方法は、同一の方法を以て打倒さるべき事

（三）獨逸の政治的詭計、奸計、遁辭を豫知すべき事

（四）獨逸の通貨支拂拒絶に對しては、相手國側に於て同一手段を以て報ゆる事

而かも逼迫せる世界情勢下にあつて、最も有力なる手段は對抗的軍備の充實にあるは論を俟たない。そして補充的手段として、獨逸對外政策遂行の妨害、中歐への經濟的進出競爭が企てられるべきであり、又經濟的に一層强硬な手段として獨逸製品のボイコットも考へられる。然し其の獨裁政體の下に組織的な經濟體制整備を企圖しつゝ、活潑な對外的活動を續ける獨逸に抗する爲には、相手國は政治的、經濟的に餘程の努力を必要とする事は否めない。

以上十七章に亙る本書の叙述は、主として獨逸をめぐる政治的關係を中心として展開された。而かも其の背後に、一層基本的部面として經濟的關心が存する事は嚴然たる事實である。斯かる分析の結果、著者は如何なる結論に到達するであらうか。既述の如く、獨逸の進路に就ての單なる豫測は困難であり、不可能に近い。著者自身又斯かる豫測を意圖しない。本書の任務は、それに從つて獨逸の對外政策なり經濟政策なりが現在遂行される其の基本的組織及び指導原理を解明するを以て充分であると見なければならない。蓋し其の理解の上に、讀者はやがて起るべき獨逸の次の行動に際して、彼自身の立場なり見解なりを正しく定め得るからである。此の目的の爲めに本書は誠に平易な、而かも廣汎な解說書として役立つ事大である。本書の內容を稍詳細に紹介した所以も亦茲に在る。斯くて「近き將來に於て、獨逸は其の進行過程に於て橫道に外れる事があるかも知れない。併し乍ら現在のナチス制度が續く限り、獨逸の政策の基本的原則が實質的變化を蒙る事はないであらう」と言ふ著者の最後の言葉は、極めて常識的かも知れないが、充分に承認し得るものである。今回の獨・蘇接近の如き、此の意味に於て解釋する事も面白からう。（三越賣價九圓九十五錢）

——一九三九・八・二五——